

つち 我等、地に生きん

— 持続可能な社会と人間の責任 —

上記タイトルの言葉を歌詞に含む「同志社大学歌」は1935年、同志社創立60周年を記念して作られ（作詞・北原白秋、作曲・山田耕筰）、今も入学式や卒業式などで歌い継がれています。北原白秋がどのような考えをもって、この歌詞を考えたのかは必ずしも明らかではありませんが、「地に生きる」を現代社会の課題として受けとめ、このシンポジウムでは「持続可能な社会」のために何ができるのか（すべきなのか）を、宗教や経済学（特にエコロジー経済学）そして「良心」の視点から考えていきます。

● 日時：2018年1月22日（月）16:40 — 18:40

● 場所：同志社大学 今出川キャンパス 同志社礼拝堂

● 講演：

小原克博（同志社大学 神学部 教授）

和田喜彦（同志社大学 経済学部 教授）

コメンテーター：

三俣 学（兵庫県立大学 経済学部 教授）

合唱：同志社グリークラブ



■ 問い合わせ 同志社大学 良心学研究センター

CONSCIENCE

E-mail : rc-csc@mail.doshisha.ac.jp <http://ryoshin.doshisha.ac.jp>

良心を世界に—良心を覚醒させる知の連携と知の実践 良心学研究センターは、現代世界における「良心」を考察し、その応用可能性・実践可能性を探求することを通じて、学際的な研究領域として「良心学」を構築し、さらにその成果を国内外に発信し、新たな学術コミュニティを形成することを目的としています。

同志社大学歌

作詞 北原 白秋

作曲 山田 耕筈

1.

蒼空に近く 神を思う瞳

拳（こぞ）れり同志社 一（いつ）の精神

伝えよ我が鐘 ひびけ高く

栄光新に 梢とそよがん

※樹（う）えよ人を 耀け自由

我等 我等 地（つち）に生きん

2.

日を月を長く 神に出づる真（まこと）

為すあり同志社 国の良心

活かせよ力に 立てよ我と

校祖の教化は 息吹（いぶき）と薫（かお）れり

※以下繰り返し

3.

この道は篤（あつ）く 神と通う智徳

幸（さち）あり同志社 三つ葉のクローバー

治めよ自ら 矜（ほこ）れ私学

京都の山河は 清（さや）かに守らん

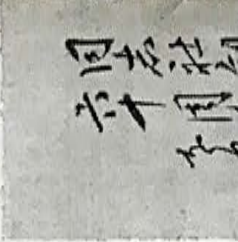
※以下繰り返し

大 学 学 歌 で ま る 來 出

山 田 耕 稼 作

由來日本の歌は節もする歌
 吟詠的なものであり歌は歌をう
 たふと云ふ事と題を渡すと云ふ事
 と同じに考へられた。私は歌花老
 圃翁と十数年以前から力の費
 すと云ふ事を唯くしてゐる。昔は聞
 かな方舞い本舞が舞い歌を本舞に
 聞まへて歩く様を費案を作らうと
 はないかと題を合してゐる。昔は
 昔詩人が歌を歌ひ舞を歌ふばかり
 が舞ではない、それも舞である
 もうが舞し舞をばにばつた舞
 を作らうではないか、さうして氣
 舞を歌へ舞つて来た。聞つて今日
 舞に舞い舞は、一舞、日本
 に西洋舞を輸入したのは昔舞歌
 會であるが舞と云ふ舞の舞
 昔舞歌の費案は今日では舞と
 舞なるものである。又私の舞歌舞
 舞院にして一限年迄舞がなな
 つた。舞院に舞歌なきことは相
 不舞であつたと思ふ。漸く二年前
 から本舞の舞院が出来て今日は舞
 舞を上げつゝある舞に思はれる
 丁度この本舞も今年六十の舞を
 聞され、舞院において我舞文化の
 舞人を出したのであるが舞に及舞
 なる歩を舞院に舞出すと云ふこ
 の舞に云ふ舞の出来たのも舞
 に舞である。舞し舞が出来たか
 らと云つて舞し舞が舞く、歌
 に舞する舞院が舞つてゐた舞も
 ならない、歌をうたふと云ふこと
 は決して舞くと云ふことでない
 舞つて聞へ舞ると云ふことであ
 ると思ふ。歌をうたふと云ふこと

定に舞する舞をうたふと云ふこと
 云ふことが舞止しい舞である。
 此の舞内から舞舞の舞に力の費
 を舞かして下され舞しい、さう
 云ふことを本舞に舞舞に舞つて
 る舞内から舞舞の舞に日本の
 舞院に歌へ舞舞して舞きた、私
 が舞つて今日聞つたのも舞が舞ひ
 たいからである。舞舞なる舞
 舞が舞舞を舞つてさうしてこの舞
 舞の舞にうたつて舞きた、それ
 は決して舞舞の舞を舞除する
 ものでない、この舞々の中にある
 舞舞の本舞の舞に舞舞ない人
 に本舞の舞を舞らすことである
 大舞舞とは十八年舞つて舞の
 良い舞の舞舞を舞つて来た、舞
 つて舞舞に舞しては多くのこと
 を舞き舞ひ舞舞取りかはされ
 てゐるので舞舞と云ふ舞舞の知
 舞は舞舞に有つてゐる。舞つて今
 舞つても、さう舞人の舞に舞た
 舞舞舞し舞、舞子の舞舞に舞
 て舞子の舞舞を舞舞が舞つする
 と云ふのは一寸良い舞舞でありま
 す舞と云ふ舞かな舞舞の中で舞
 をうたふと云ふことは舞舞に舞ら
 れるものでない。
 為がこの歌を舞んで舞つること
 は舞舞を舞し舞舞の二舞は本舞に
 この本舞の舞を舞舞舞に舞へま
 舞してゐる舞三舞四はそれを舞
 舞に舞さうとするところの舞舞の
 舞女舞ひであると思ふ。さうして
 舞舞の部分には舞舞がたの舞つ舞
 かし、舞舞の中にある舞舞のシャ
 ヲトであらうと思ふ。さう云ふ舞
 舞で舞は舞舞の二舞は舞舞なる
 コチケイロン舞歌とか市歌と
 か大きな一つの舞舞の下に舞く歌
 の舞をこれに舞へた舞舞なる舞
 舞の舞舞の部分と舞へた舞三、
 四舞は舞舞の舞の舞のフリロと云
 ふ舞舞に舞る、舞と舞舞舞舞して
 この歌の舞舞を舞へた舞である。
 舞舞の部分には舞舞舞舞舞舞
 らしい舞舞の舞舞を舞した。



聖書讚 邦



聖書讚、聖書歌の舞に、
 同志社舞舞者として舞書
 山舞舞舞の舞舞あり、舞
 は舞山舞舞の舞舞舞舞舞
 年舞舞舞、三年舞舞舞舞
 舞二舞(明治四年舞舞舞)
 舞舞月(明治五年舞舞舞)
 八年舞舞舞舞舞の舞舞舞
 聖書
 舞が日本舞に舞舞せと
 とは、舞舞、舞舞の舞舞を
 本舞舞舞舞舞舞舞舞舞
 舞である。それ舞舞の
 舞りの舞舞を舞、舞
 てシンガポール舞は舞舞
 又舞舞に入つてから舞
 舞舞舞舞舞舞舞舞舞舞
 により、本年の舞舞舞
 された。かくて舞
 舞舞舞舞舞舞舞舞舞舞
 けて明治七年より上
 舞舞舞舞舞舞舞舞舞舞
 より舞舞に舞舞舞舞舞舞
 この舞舞の舞舞に舞
 舞舞舞舞舞舞舞舞舞舞
 舞舞舞舞舞舞舞舞舞舞
 舞舞舞舞舞舞舞舞舞舞
 舞舞舞舞舞舞舞舞舞舞

講師略歴

小原克博 (こはら かつひろ)

1965年、大阪生まれ。マインツ大学、ハイデルベルク大学（ドイツ）に留学。同志社大学大学院神学研究科博士課程修了。博士（神学）。

現在、同志社大学神学部教授、良心学研究センター センター長。日本宗教学会 理事、日本基督教学会 理事、宗教倫理学会 会長、京都民医連中央病院 倫理委員会 委員長も務める。一神教学際研究センター長（2010-2015年）、京都・宗教系大学院連合 議長（2013-2015年）等を歴任。

専門はキリスト教思想、宗教倫理学、一神教研究。先端医療、環境問題、性差別などをめぐる倫理的課題や、宗教と政治の関係、および、一神教に焦点を当てた文明論、戦争論に取り組む。

単著として『宗教のポリティクス——日本社会と一神教世界の邂逅』（晃洋書房、2010年）、『神のドラマトゥルギー——自然・宗教・歴史・身体を舞台として』（教文館、2002年）、共著として『宗教と対話——多文化共生社会の中で』（教文館、2017年）、『原発とキリスト教——私たちはこう考える』（新教出版社、2011年）、『原理主義から世界の動きが見える——キリスト教・イスラーム・ユダヤ教の真実と虚像』（PHP 研究所、2006年）、『よくわかるキリスト教@インターネット』（教文館、2003年）、『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』（世界思想社、2001年）、『E U世界を読む』（世界思想社、2001年）などがある。

近刊として『一神教とは何か——キリスト教、ユダヤ教、イスラームを知るために』（平凡社新書、2018年2月）がある。

HP: <http://www.kohara.ac>

和田喜彦 (わだ よしひこ)

1960年、長野県須坂市生まれ。横浜市立大学にて国際協力論を学ぶ。財団法人国際開発センター勤務等を経て、ブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）大学院に留学。コミュニティー地域計画学研究科博士課程修了（PhD、学術博士）。グローバル・フットプリント・ネットワーク、バーモント大学客員研究員等を経て、現在、同志社大学経済学部教授、良心学研究センター研究員。アントロピー学会世話人、環境経済・政策学会会員、縮小社会研究会会員。NPO 法人エコロジカル・フットプリント・ジャパン 会長。専門は、エコロジー経済論、公害論。

単著として、「原子力発電には妥当性があるのか？—エコロジー経済学と社会的公正の視点から」『福音と世界』2016年1月号。“Good News from the Global Footprint Network - and Bad News from the Fukushima Nuclear Disaster.” In John B. Cobb, Jr. and Ignacio Castuera, eds. *For Our Common Home: Process-Relational Responses to Laudato Si'*. (Process Century Press, 2015). 「マレーシアでのレアアース資源製錬過程による環境問題：エイジアンレアアース(ARE) 事件の現況とライナス社問題」『環境情報科学』第43巻第4号（2015年）。「基調論文：エコロジカル・フットプリント開発の背景とその意義」『ビオシティ』56号（2013年）などがある。共著として、『テキストブック 環境と公害：経済至上主義から命を育む経済へ』日本評論社（2007年）などがある。HP: <https://www1.doshisha.ac.jp/~yowada/top.html>

コメンテーター略歴

三俣 学 (みつまた がく)

1971 年生まれ。2000 年、同志社大学大学院経済学研究科修了。2004 年、京都大学大学院農学研究科単位取得退学。英国・リヴァプール大学マックス研究所・客員研究員（2006 年度）、米国ワシントン州エヴァーグリーン大学交換教員派遣（2011 年度）を経て、現在、兵庫県立大学経済学部教授。同大学環境経済研究センター・センター長。環境経済・政策学会理事。専門はエコロジー経済学、コモンズ論。

単編著として『エコロジーとコモンズ』（晃洋書房、2013 年）、共編著として『都市と森林』（晃洋書房、2017 年）、『コモンズ論の可能性：自治と環境の新たな関係』（ミネルヴァ書房、2010 年）、『コモンズ研究のフロンティア：山野海川の共的世界』（東京大学出版会、2008 年）、共著として『環境と公害：経済至上主義から命を育む経済へ』（日本評論社、2007 年）、『環境経済学の新世紀』（中央経済社、2003 年）、『入会林野とコモンズ：持続可能な共有の森』（日本評論社、2004 年）、翻訳書に『コモンズのドラマ：持続可能な資源管理論の 15 年』（知泉書館、2012 年）、英論文に Mitsumata Gaku (2013) 'Complementary Environmental Resource Policies in the Public, Commons and Private Spheres: An Analysis of External Impacts on the Commons', in Murota Takeshi and Ken Takeshita (2013) eds., Local Commons and Democratic Environmental Governance. United Nation University Press. pp. 40-65. などがある。

持続可能な社会を考える視点としての「大地性」「身体性」

小原克博

1. 持続可能な社会をめぐる問題の所在

1) 課題への応答の一例——「不在者の倫理」

- 現代世代の利益を最大化することを前提とした近代的（西洋的）なコミュニティ意識を批判的に検証し、過剰に人間中心的でもなく、現代世代中心的でもない公共性（公益性）を再発見・再解釈する必要がある。
- 日本宗教の場合、世代間の権利関係を超越して、生者と死者の関係、生命・非生命の関係にまで議論を広げることができるポテンシャルを有している。
- 「過去の不在者」と「未来の不在者」を統合的に見、その中間存在としての「現在の存在者」（我々）を倫理的に止揚する視点としての「不在者の倫理」（Ethics of the Absent）。
- 「不在者の倫理」の構成要素：食の倫理、犠牲の倫理、記憶の倫理

詳しくは拙論「不在者の倫理——科学技術に対する宗教倫理的批判のために」（『宗教と倫理』第16号、2016年、3-17頁）参照。

<http://www.kohara.ac/research/2017/01/Ethics-of-the-Absent.html>

2) 導き出されるキーワードとしての「身体性」「大地性」

- 近代における課題：地（つち）に生きる（cf. 血と大地）
- IT（SNS、AI）時代における課題：視覚と聴覚に特化した身体感覚

2. 同志社の関係から

1) 徳富蘆花（1868-1927）：土に生きた平和主義者（晩年、武蔵野で半農生活）

「農」

我父は農夫なり 約翰伝第十五章一節

一 土の上に生れ、土の生むものを食うて生き、而して死んで土になる。我儕は畢竟土の化物である。土の化物に一番適当した仕事は、土に働くことであらねばならぬ。あらゆる生活の方法の中、尤もよきものを択み得た者は農である。

二 農は神の直参である。自然の懐に、自然の支配の下に、自然を賛けて働く彼等は、人間化した自然である。神を地主とすれば、彼等は神の小作人である。主宰を神とすれば、彼等は神の直轄の下に住む天領の民である。綱島梁川君の所謂「神と共に働き、神と共に楽しむ」事を文義通り実行する職業があるならば、其れは農であらねばならぬ。（徳富蘆花『みみずのたわこと』1913年）

2) 同志社大学歌（1935年）について

「私は親友北原白秋と十数年前から力の音楽という事を唱えている、非常に朗らかな力強い大男が黒い足を大地に踏まえて歩くような音楽を作ろうではないかと語り合っている。……しかし歌が出来たからと言ってもし歌い方が悪く、歌に対する観念が誤っていたら何もならない。

歌をうたうということは決して泣くということではない。強いて言えば祈るということであると思う。歌声を合せと本当に自分に感ずるところを天にぶつけるということがもっとも正しいところである。……大中（注：大中寅二〔経済学部卒業、オルガニスト〕のこと）君とは十八年間ずっと仲の良い師弟の間柄を続けてきた、したがって同志社に対しては多くのことを聞き面白い談話が取りかわされているので同志社という学校の知識は相当にもっている、したがって今日伺っても、そう他人の家に来た様な気がしない。……（注：歌の）繰返の部分はこれは無邪気な子供らしい喜びの調子で書いた。」

（山田耕筰「大学学歌の出来るまで」、『我等ノ同志社——同志社創立六十周年記念誌』62頁。読みやすさを考え、一部、現代表記に改めている。）

3. 日本宗教の視点から

鈴木大拙『日本的靈性』（初版1944年）における「大地性」

「靈性はどこでもいつでも大地を離れることを嫌う。靈性は最も具体的なることを貴ぶ。何が具体かというとき……山を山と見、水を水と見るのが、具体的な見方なのである。……有が無で、無が有であるとか、心がどうの、意がどうの、識がどうのと云うのは、抽象的である。」

（『鈴木大拙全集』第八巻「日本的靈性」72頁）

4. キリスト教の視点から

1) イエスの言葉に見る「大地性」

「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだれが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思ひ悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。」（「マタイによる福音書」6章25-30節）

2) 田中正造（1841-1913）

- 19世紀末～20世紀：銅の需要が急増した時代（日露戦争等の軍需）。社会の電氣化の進行。
- 足尾銅山鉍毒事件：足尾銅山から有毒重金属を含む廃水が流れ、漁業・農業に甚大な被害をもたらす。1891年、田中正造による政府批判。1907年、谷中村の廃村（「富国強兵」の犠牲）。
- 土（谷中村での生活）とデモクラシーの関係：富国強兵の時代精神の中で。特定の人々、特定の地域に犠牲を押しつけることによって成り立つ豊かさ。

【参考】三浦頭一郎『田中正造と足尾鉍毒問題——土から生まれたリベラル・デモクラシー』有志舎、2017年。

3) ユルゲン・モルトマン (1926-、ドイツの神学者)

「どの神学も前提とすることは、人間でも自然でもなく神こそが、神の被造物である世界の中心だということである。これによって、人間と自然の関係は非中心化される。……このことはノアの契約に最もよく表現されている。「見よ、私はあなたがたと、あなたがたの子孫と、あらゆる生き物と、契約を結ぶ」(創世記九 9~10 節)。……他の生物を理由なく破壊する者は神の契約を破壊し、生存の負担を将来の世代に押しつける者は神の契約を破ると。地上における生命を保証するノアの契約は、社会契約と世代間契約の成文化と、人類の自然との契約の成文化を要求する。」(『希望の倫理』新教出版社、2016 年、245-246 頁)

5. 良心学の視点から

1) 良心の「身体性」「大地性」

➤ 「良心の全身に充滿したる丈夫の起り来たらん事を」(新島襄の 1889 年の手紙の言葉から、1940 年「良心碑」に)

良心の起源：脳科学、進化生物学の視点から

➤ 看山高巍々 観海濶洋々 味得造化妙 小心少発揚
(『新島襄全集』第 4 巻、307 頁)

高山に接し、揚々たる海を見て、造化の妙を味わう。聖書の創造神に対する信仰が表されている。ニューイングランド・ピューリタニズム (特にジョナサン・エドワーズ [1703-1758]) の自然観の影響か。

2) 良心の実践

良心を観念的・抽象的なものにとどめてはならない (→「社会的良心」)。良心を精神論から解放する手がかりとして、良心の「身体性」「大地性」に着目することは有益ではないか。それが、持続可能な社会の構想や形成にもつながるのではないか。

人類文明の基盤としての土壌

和田喜彦

1. 「土壌」、「表土」(topsoil)

土壌の3要因

物理的要因、化学的要因、生物的要因

土壌の形成スピード 表土の脆弱さ、

生物多様性の宝庫

2. 身土不二

植物と「土壌」、動物と「消化官」

分解者としての土壌微生物 1グラムの土壌中 数十億個

分解者としての菌と消化酵素、腸内微生物、腸内フローラ、100兆個

母なる大地の機能の一部を宿す動物、ポータブル・ソイル、モーバイル・ソイル

太陽光⇒光合成 緑色植物=第一次生産者(Primary Producer) 有機物

『君あり、故に我あり』(サティッシュ・クマール、2005年) ⇒土あり、故に我あり

3. 土壌と文明

カーター&ディール(1995年)『土と文明』

柳澤桂子(2004年)『母なる大地』

4. 田中正造 帝国議會議員、非暴力・抵抗エコロジー運動のパイオニア、人権思想・運動家

足尾銅山鉍毒煙害事件 田中は、政府に銅山の操業停止を要求(鉍業停止論)。

菅井益郎(2017年)『不条理に抗して:反公害・反原発・反権力に生きる』。

明治憲法・立憲主義。政府は、不完全な排水沈殿池を造ることでお茶を濁し、操業は継続させた。cf. 栗原彬(2000年)『証言水俣病』(岩波新書)「生産力ナショナリズム」

『真の文明は、山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし』

「国土の尊厳を破壊し蹂躪するは亡国の始めなり。」

農という土壌ともっとも近い生業を持つ人々に寄り添い、被害農民から学ぶ

キリスト教、新井奥邃(おうすい)、内村鑑三などの影響。聖書は羅針盤

「見よ、神や谷中にあり、聖書は谷中人民の身にあり」。

栗林輝夫(2017年)『日本で神学する』

5. 国土の尊厳を破壊し蹂躪するもの

公害:水俣病、イタイイタイ病事件、

マレーシアのエイジアンレアアース(ARE)事件、ライナス問題

戦争:枯葉剤、原爆・水爆などの核兵器開発と使用、劣化ウラン弾、

原子力エネルギー、スリーマイル島原発事故(1979年)、チェルノブイリ原発事故

(1986年)、福島原発事故(2011年)、日常的な原発労働者の被曝
原発再稼働の是非、再生可能エネルギーは持続可能か

6. 土地所有と平等な分配

聖書の経済原理、トルストイの大地の寓話 グローバル化する経済、ランドラッシュ、
エコロジカル・フットプリント、フードマイレージ、バーチャルウォーター

7. まとめ：持続可能な文明の基盤としての土壌

良心学研究センターが主催した過去のシンポジウムの配付資料や動画は、ウェブサイト
(<http://ryoshin.doshisha.ac.jp>) や YouTube で公開されています。ぜひ、ご覧ください。